

# 課題発見から学生が かかわるビジョンづくり

開学3年目を迎えた叡啓大学では、  
2030年に向けたビジョンづくりを教職員だけでなく、  
学生たちも一緒になって進めている。  
そのユニークな取り組みから、  
22世紀型の人材育成のあり方が見えてくる。



特任教授  
いしかわ まさきのぶ  
**石川 雅紀**  
工学博士（東京大学）

## どんな意見も否定せず 多様性を認める

「違う環境に育った人たちが集まり、それぞれの当たり前がある中で、正解のないものをつくっていく。それには学生も含めたステークホルダーすべての参加が必要です」と話すのは、中期ビジョン検討委員会委員長の石川雅紀特任教授。目標はみんなが自分ごととしてとらえられる共通のビジョンづくりだ。それでこそ実践可能な未来像が描けるという。



活動のスタートとして、第1弾リスニングキャンペーンでは、叡啓大学のよいところを挙げるグループワークを行った。学生からも積極的に意見が飛び出し、学生、職員、教員の間に壁がないなど小規模な大学だからこその価値が見えてきた。「学生は1年次から全科目をグループワークなどを主体としたアクティブラーニングで学びます。2年・3年次には課題解決演習（PBL：プロジェクト型学修）で学外の調査を経験し

ます。そのため、自分と異なる意見に対して、まず考えてみる姿勢を持ち、多様な意見を尊重しながら受け入れて活かす方法を考えます」。複数の意見が互いに刺激し合いながら徐々に整理され、結論に至る過程は、プレストの真骨頂。学生からは「楽しい」の声が聞かれる。「高校までは、周りから『意識が高い』などと揶揄されるのが恥ずかしくて何も言えなかったという学生も、本学に来れば『普通』です。安心して発言できる場があれば、彼らはいくらでも可能性を開花させていきます」

## 先行き不透明な時代を 生き抜く力を

街中キャンパスの最上階で第2弾リスニングキャンペーンが開かれると聞き、足を運んだ。学生たちが日本語や英語で談笑するフロアの光景は、「壁がない」叡啓大学ならではの、やがて参加メンバーが集まり、イベントが始まる。

本日のテーマは、今できていないことや将来こうなりたいなど、課題や改善点の摸索だ。5つのグループに分かれて、さっそくディスカッションがスタート。「質より量」を意識したアイデア出しから、最後のプレゼンテーションまで、あっという間に100分が過ぎる。多彩な意見の中には社会、地域、企業などのかかわりやつながりをより強く求める声も多かった。

「今回のビジョンづくりは、全体のアプローチをゴールまで詳細に設計していないことも特徴です。現状の価値と今後の課題が見えてきたら、自ずとめざすべき方向性も定まってくるでしょう」と、石川特任教授は柔軟な展開を考えている。

こうした独自の学びや活動を通して、学生たちは先行き不透明な時代を生き抜く力を身につけていくのだろう。2025年春には初の卒業生が巣立つが、「企業内起業家」のような人材を求める企業は注目したいところだ。 **Ad**

## 社会を前向きに変える チェンジメーカーを育成

広島駅から徒歩10分の街中に、2021年広島県が設置。システム思考とデザイン思考でイノベーションを生み出す、チェンジメーカーの育成をめざす。すべての科目で学生参加を促す授業スタイルなどが特色。

